学校を創る

湖北元気プロジェクト
～地域に貢献し、地域に愛される学校を目指して～

県立湖北特別支援学校長　小倉（おぐら）　京子（きょうこ）

1　はじめに

本校は、我孫子市にある手賀沼の東に位置し、普通科と専門学科である流通サービス科の２科を併置する高等部のみの特別支援学校（県内唯一の形態）である。

今年度は、開校７年目を迎え、生徒数は普通科88名、流通サービス科47名の合わせて135名である。（令和２年10月１日現在）

教育を進めていく上で「仲間と学び合い、ともに働き、地域で生きていく」を合い言葉に、学校は地域とともに、そして生徒は地域で自分らしく生きることを目指している。

2　地域とのつながりを大切に

高等学校の後（あと）施設を活用して開校したため地域との結び付きは強く、地域の方々から温かく受け入れていただいている。例えば、湖北地区福祉まつりに学校紹介や作業製品の展示をさせていただいている。また、本校の生徒の約半数が利用しているJR湖北駅には、駅長さんをはじめ駅員さん方による出張授業や、駅での自力通学生の緊急対応訓練への協力などをしていただいており、日頃の生徒の登下校の見守りにもつながっている。

JR湖北駅の駅員さんの授業

本校の校舎～春は満開の桜でいっぱいに～

3　環境教育モデル校として

日頃の地域とのつながりを生かして、今年度は県の環境教育モデル校としての取組を普通科の園芸班が中心となって進めている。

学校から歩いて５分ほどの所に湖北小学校があり、グラウンドの落ち葉の清掃をさせていただき、その落ち葉を活用して堆肥作り、土作りをしている。その土で、パンジーやビオラ、ガーデンシクラメンなどの花苗を育て販売している。11月には、その土と花苗で、小学校の花壇作りをさせていただき、地域に還元する取組をすることができた。今後も地域循環型の教育活動に継続して取り組んでいく予定である。

湖北小学校のグラウンドで落ち葉掃き

4　地域に親しんでいただける店として

流通サービス科の食品・サービスコースでは、「オネット」（※仏語で「誠実」と言う意味）と名付けた店でパンと焼き菓子を販売している。

地域の皆様にたくさん足を運んでいただき、開店日には、行列のできる店となっている。

オネット～今日のおすすめは？～

コロナ禍で開店できなかった時には、日頃なかなか購入が難しい保護者向けに、「湖北元気プロジェクト」として注文販売を実施した。緊急事態宣言中は校内のみの注文販売となっているが、今後、コロナ禍でも地域の皆様の手に届けられるよう、注文販売等の方法を模索中である。

5　地域に貢献できることは何か

「地域に貢献し、地域に愛される学校づくり」というアンケート調査を教職員に実施し、これまでの学校と地域との関わりを整理した。

上述の「オネット」のほか、流通・メンテナンスコースは、事務班が近隣の学校や市役所等から受注し名刺を作って納品したり、学区の印西市役所から封筒のスタンプ押しや手提げ袋作りなども受注・納品したりするなど、日々の専門実習の内容として定着している。

メンテナンス班では、日頃の校内での清掃実習の成果を地域でも発揮できるようにと、小学校やコホミン（湖北地区公民館）の清掃をさせていただいている。生徒にとって、学んだことを生かせる場として大切な機会である。それぞれの場所で職員の皆さんから、「きれいになったよ。ありがとう。」と声をかけられることは、何よりも生徒たちの自信となり、その後の活動の意欲や仕事のやりがいにつながっている。

体育館の窓は高いけれど頑張ろう～湖北小学校～

コホミンの窓をピカピカにしよう～湖北地区公民館～

6　おわりに

今後も、地域で生徒が活躍する様々な機会をいただき、地域の方々からの支援を受けつつ、地域に還元していける学習活動をさらに設定していきたい。そして、学校の教育活動を地域の方々にご理解いただき、生徒の活動の様子を身近に見て声をかけていただけるように、地域から愛される学校づくりをさらに進めていきたい。

それは、生徒たちが在学中だけでなく卒業後も、学校のある湖北地域で、さらには生徒自身が住んでいる地域で、自分らしく豊かに生きていく基盤となるものであるからと考えている。

学校を支える

児童・教職員・地域の「輪」を目指して

南房総市立富山小学校教頭　眞汐（ましお）　眞奈美（まなみ）

1　はじめに

本校は南房総市の北西部に位置し、西は東京湾に面し、東は山間部で富山三山（富山、御殿山、伊予ヶ岳）がそびえ立つ、自然豊かな地域にある。

平成28年に小中一貫校となり、平成29年には子ども園（幼稚園、保育所）が加わり、保幼小中一貫校としてスタートした。

本校は、「豊かで逞しい心をもった子どもの育成」という学校教育目標のもと、「チーム富山」として教職員や保護者、地域の方々が協力しながら、特色ある学校づくりを展開している。

そのような中、昨年度、新任教頭研修会に参加し、「教頭の心構え」や「学校運営に必要な資質」等、様々な講話や演習、協議などからたくさんのことを学ばせていただいた。どの研修からも根本は、「元気な学校づくり」をしていくことが大切であると感じた。

2　地域とともに

校長は、「地域を学ぶ　地域に学ぶ　地域が学ぶ」とよく話す。地域と学校が一つになり、豊かな関わりや経験を重ねていく中で、子供たちに未来を切り拓く力が育ち、地域を理解する機会が増え、感謝の気持ちや思いやりが養われる。

本校では、特色ある教育活動として、地域の人材を生かすことを教育課程の中に位置付けている。富山地域の方々はとても協力的であり、いろいろな学習や場面の中で協力をいただいている。

⑴地域ボランティアの活用

各学年の教育課程の中に、富山学（南房総学＝地域学習）が位置付けられている。

１・２年生「富山のお話を聞こう」のお話会、３年生「富山を探検しよう」の牧場や農業体験、４年生「南総里見八犬伝」の紙芝居、５・６年生「富山博士になろう」等では、地域の方々との交流を通して多くのことを学び、富山地域のよさを教えていただくことで、よりよい学びにつなげている。

４年生「南総里見八犬伝」紙芝居

⑵子供たちの見守り

富山地域にはたくさんの「見守り隊」がある。富山地域づくり協議会（ふらっと）の方々による登下校の見守り、「放課後見守り隊」として、放課後の学習教室が始まる前と終わりに子供たちを見てくれる方々、「あひるの会」による本の読み聞かせ等、たくさんの方々に見守られ、支援していただいている。

⑶地域の支え

令和元年の二度の房総半島台風では、市内各所で被害を受けた。幸いにも本校は学校施設での大きな被害はなかったが、停電、断水に

なった。そんな時に、地域の方が真っ先に来校し、発電機を動かして電気を通してくれた。また、スクールバスの駐車場に大木が倒れてしまい、バスが通ることができなくなってしまった時も、地域の方が木を撤去してくれた。

このように、学校のためにいろいろな面で支援してくれることから、学校は地域に助けられ、支えられて過ごしていることを改めて感じる。地域の方の学校への思いは大変ありがたいものであり、その思いをしっかりと受け止めながら、上手く調整していくことが教頭としての役目である。地域の方々に感謝すると同時に、子供たちにとってより効果的なものとなるよう取り組んでいく。

3 「チーム」として

常にアンテナを高くし、児童や教職員に声をかけ、コミュニケーションを図り、気持ちよく働ける環境づくりに努めている。組織のムードやチームワークのよさは教職員をやる気にさせ、育て、鍛えることにつながる。

具体的には、毎日、教室を回り、子供たちや教職員、授業の様子等を観察し、称賛や励ましの一声をかけるよう心掛けている。

本校は単学級なので、全職員で全ての子供を見て指導にあたっている。職員室では、子供たちの様子の情報交換が盛んに行われており、よいことも悪いことも積極的に伝え合う雰囲気がある。そんな教職員の話を聞くことが楽しみである。また、子供の成長を一緒に喜び、相談や要望に対しては、解決方法を提案し、一緒に考えるようにしている。児童や保護者のこと、学習指導、学校行事、校務分掌のことなど、毎日いろいろなことが持ち込まれるが、自分の仕事の手を止め、しっかりと耳を傾け、すぐに対応するよう心がけている。

今、喫緊の課題となっている働き方改革。教職員の業務を少しでも軽減できるよう推進していくことで、時間的余裕ができ、子供たちと触れ合う時間ができる。

本校には、３年前に校務支援システムが導入され、出席簿や通知票、指導要録などをICT機器を利用して効率よく作成することができる。校務分掌などの文書等については、毎年必要な書類は電子データで作成し、整理して保存する。それを学校全体で共有できるようにしている。

また、毎週月曜日は「ノー残業デー」とし、可能な限り早く仕事を終わらせ、退勤しようと声をかけている。今では、月曜日は「ノー残業デー」という雰囲気が作られ、全職員が早めに退勤することが徹底できている。

子供に接する教職員が心に余裕をもち、笑顔でいられるようにすることが使命だと考える。そうすることで、子供たちの学校生活が潤いのある充実したものになっていく。

4 おわりに

小学部の教頭として２年目を迎えたが、令和元年の房総半島台風から始まり、新型コロナウイルスへの対応と、教諭時代には経験したことのない出来事にも遭遇している。「新しい生活様式」に対して、日々模索しながら取り組んでいる毎日である。

しかし、それも校長先生をはじめ中学部の教頭、教職員、そして家庭や地域の方々と協力しているからこそ実践できている。

教頭として、これからも「ひと、もの、こと、心」を繋いでいくことを念頭に置き、子供たちの笑顔へと繋げていけるようにする。学校・家庭・地域が連携し、「輪」を大切にしながら、努力を重ねていきたい。

学校を動かす

つながり
～「チーム学校」を目指して～

松戸市立新松戸南中学校主幹教諭　染谷（そめや）　豪（たけし）

1　はじめに

本年度より本校に赴任し、教務主任として校務にあたっている。教務主任として５年目を迎え、主幹教諭としては２年目を迎えた。若年層教諭も増え、組織を築き上げる難しさとその重要性を感じている。校長の指導の下、チーム全体でつながりを持って教育活動を行っていくことが大切であると考え、学校運営に関わっている。

2　大切にしている３つの「つながり」

⑴学年主任とのつながり

近年では教諭経験10年ほどで学年主任を任されることも珍しくない。苦慮しながら学年を動かしている学年主任の思いに耳を傾け、ニーズを教育計画に取り入れることも重要だと考えている。月行事予定等も共に検討し、先を見通した活動ができるよう助言している。また、短時間の学年主任会を設定し、各学年の生徒や職員の状況を共有したり、共通理解事項の伝達をしたりすることで、各学年が同じ温度で教育活動ができるようにしている。各学年の若年層教諭の育成のためにも学年ごとにフォロー体制をつくり、チームで動けるように支援している。

⑵研究主任とのつながり

生徒の学力向上のためには、研究主題に向けた教科経営等のPDCAサイクルが不可欠である。研究主任と連携し、全国学力・学習状況調査や学力確認テスト、生徒による授業評価アンケート等から生徒の実態を把握し、生徒の課題を明確にしていく。年内にはプロジェクトを立ち上げ、次年度に向けた課題に対する改善策を、研究主任と共に検討することが重要であると考えている。生徒の実態はもちろんだが、教職員の実態を踏まえた上での具体的なプランを研究主任と共に立案・提案することで、「学力向上」という同じ目標の下、足並みを揃えてチームで向かって行く雰囲気をつくりたい。

⑶管理職とのつながり

教務主任は、校長が示す学校教育目標の具現化を図るために、校長、教頭の指導の下、教育課程を編成し、実践する役割を担う。そのために管理職と教職員とのパイプとなり、ビジョンが具体的な実践になるように、連携を大切にしている。教職員の思いや悩みを感じ取り、管理職と情報共有することも大切な役割である。

また、主幹教諭としては教頭の業務補佐の役割も担う。主幹教諭レベルで行える業務については率先して行い、教頭が学校運営をしやすい環境をつくることに努めている。

3　おわりに

教職員一人ができることには限界があるが、チームとして対応することで多様な考えが生まれ、大きな力を発揮する。今の学校には、チームとしての組織的な対応が求められている。

今まで先輩方から多くのことを学び、多くの職員に支えられて現在の職務ができている。主幹教諭、教務主任として多くの人たちとのつながりを大切にし、「チーム学校」の中核となり学校を動かすことができるよう、更に研鑽を積み、職務に邁進していきたい。

子供を知る

一人一人と向き合う

四街道市立四街道小学校教諭　郡司（ぐんじ）　光（ひかり）

初任者として一年間を過ごし、様々なことに気付き、学ぶことができた。特に心に留めてきたことが二つある。

一つ目は、子供の話を聴くことの大切さである。聴く姿勢をもつと、些細なことでも小さな悩みのうちに相談してくれるようになった。また、子供の好きなことや気持ちもだんだんと理解できるようになってきた。同じような話をしていても、伝わる子供もいれば上手く伝わらない子供もいることもわかった。子供に伝わる話し方を知る上で、日常的なコミュニケーションの重要性を感じた日々でもあった。様々な考え方をもつ子供たちの話を聴き、折り合いをつけることの大変さも学んだ。

二つ目は、学習指導である。教科によって、得意な子供もいれば苦手としている子供もいる。苦手としている子供には、教師が寄り添ってつまずいているところを説明したり、ヒントを与えたりする中で理解していく様子が見られた。また、問題の出し方を工夫することで子供が興味をもって学習に取り組むこともできた。授業が終わった後に「今日の授業は楽しかった」と子供が話している姿を見て、自分自身のやる気にもつながった。

子供たちに成長させてもらった一年でもあった。これからも一人一人と向き合う姿を忘れず、子供たちの成長を支えることができるように、日々精進していきたい。

子供を知る

教師である私は「能動的な学習者」になり得ているか？

県立姉崎高等学校教諭　山村（やまむら）　向志（こうし）

教員２年目となった今年。昨年度から一貫して取り組んできたテーマが、担当する社会科授業での「主体的・対話的で深い学び」の実現である。生徒が教科の見方・考え方を働かせ、他者と協働して問題解決を図っていく。先行きが見えない今の時代だからこそ、主体的に学び、問題解決を行っていく資質能力がより一層求められている。

しかし、そのような実践を目指す中で気付いたことがある。それは教師である私自身が「能動的な学習者になり得ているのか」ということである。生徒が学びに没頭するような授業を作りだすためには、まず教師自身が「能動的な学習者」であり、「問題解決の主体」でなくてはならない。生徒は教師を見ている。教員の教材への熱量やそこでの学びの過程が、授業の根幹を成すのである。

働き方改革が叫ばれる昨今、教員の生活は多忙化を極め、日々の中で学びの時間を確保することはなかなか難しい。そのような意味で、初任者研修は学校生活から離れ、自身の実践や教室での営みを見つめ直すことができる有意義な機会となった。自分が学び手として参加し、他校の教員と悩みを共有しその解決に向けてアイデアを出し合う。その過程はまさに「主体的・対話的で深い学び」であるし、学習者の立場から授業を捉え直すことができる貴重な経験にもなった。

今後も研修で学んだことを生かし、常に学び続ける姿勢を忘れず、生徒たちと共に成長していきたい。

授業を創る

目指すべき数学の授業の考え方 ～球の体積の求め方を通して～

柏市立西原中学校教諭　堂免（どうめん）　昌弘（まさひろ）

1　はじめに

平成29年、30年に改訂された学習指導要領には、「生きる力を育む」という目標が設定されている。

数学の授業においては、ただの公式の暗記ではなく、「なぜそうなるのか」という部分を考え、理解していくことが必要であると考える。

東京学芸大学の藤井斉亮先生は著書の中で「教師の３つのステップ」について以下のように書かれていた。

「公式の使い方を教えることができる」教師はステップ１、「なぜその公式になるのかを教えることができる」教師がステップ２、「公式を生徒に見つけさせることができる」教師がステップ３である。

日々の授業の中で、「公式や解き方を自分で考えさせる」ことができれば、「生徒の生きる力を育む」ことに繋がる。

そこで、今回は、ステップ３「公式を生徒に見つけさせることができる」教師を目指し、「空間図形の球の体積の求め方」の単元の授業展開を考えた。

2　授業実践の概要

⑴単元「空間図形」の指導計画

時配	学習内容
2	いろいろな立体について
1	直線や平面の位置関係について
1	面が動いてできる立体について
1	立体の投影図
2	立体の展開図
4	立体の表面積について
2	立体の体積について
1	球の表面積について
1（本時）	球の体積について
1	章のまとめ

⑵本時の目標

①球と円柱の重さの関係を調べることできる
②球の体積の求め方を見つけることができる
③球の体積を求めることができる

⑶本時の展開

時配	教師の発問・生徒の学習活動
10分	「復習です。体積の定義は何か？」 →その立体の中に含まれる体積１㎤の立方体の数 「球の体積をどう求めるか？」 →曲面になっているから、立方体の数を数えることができない 「どうすれば球の体積を求めるができるか？」 →水に沈めて水嵩を測る。他の立体と比べる。容器を作って調べる。 「どの立体と比べればよいか？」 →球と近い立体。円。円柱。円錐。 「円錐はどの立体と比べたか？」 →円柱と比べた 「円柱を元とする立体と考えて、球と円柱を比べよう」
20分	「ここに粘土と模型を作る型がある。半径や高さがｒの球と円柱を型を使って粘土で作り、それぞれの重さを比べよう」 ※使用した教具の写真は以下に記載

	→生徒は、４人の班になり、２組の「半径の等しい球と円柱」の模型を作成する。それぞれの重さを測る。それぞれの球と円柱の重さの比を求める。
５分	「球と円柱の重さの比を求めよ」 →「球：円柱＝４：３」 「重さと体積は比例関係にあるから、重さの比＝体積の比である。」 ※比例反比例の単元で学習済み
10分	「半径ｒ、高さｒの円柱の体積を元に、半径ｒの球の体積の求め方を考えなさい。」 →円柱の体積はπr^3 球の体積：円柱の体積＝４：３ 球の体積：　πr^3　＝４：３ ３×球の体積　＝$4\pi r^3$ 球の体積　＝$4\pi r^3$／３ 「球の体積についてのまとめ 体積の求め方がわからない立体は、すでにわかっている立体と比べればよい。 球の体積：円柱の体積＝４：３ 半径ｒの球の体積は、$4\pi r^3$／３で求まる。」
５分	「演習」 ・半径４cmの球の体積を求めよ ・半径５cmの球の体積を求めよ ・半径３cmの半球の体積を求めよ →机間指導 →発表

※使用した教具について

プラスチック素材の型を作り、生徒へ配付した。そこに粘土を詰め、球と円柱を作成した。

半径３cmの球と半径３cm高さ３cmの円柱、半径５cmの球と半径５cm高さ５cmの円柱の２組の模型を作り、重さをはかった。

⑷生徒の反応

①４／３の意味を理解し、さらに数学に興味を持つ生徒が増えた。

②数学的活動を通して、意欲的に授業に取り組む生徒が増えた。

③約70％以上の生徒が「$4\pi r^3$／３」を導き出すことができた。

３　成果と課題

⑴成果

数学的活動を通して、球の体積の求め方を考えさせることで、実感を持って公式を導くことができた。本授業を終えても、球の体積の求め方を覚えている生徒が多くいた。「４／３」の意味を知り、より数学に興味を持つ生徒が増えた。

⑵課題

生徒に活動させるにあたって、授業時間の確保をしなければならない。重さを測る際に生まれる誤差について、生徒に指導する機会となった。重さと体積が比例関係にあることを、比例の単元で教えておくとよい。

４　参考文献

⑴算数・数学教育（教科教育学シリーズ第３巻）橋本美保（監修）田中智志（監修）藤井斉亮（編集）2015年10月８日

⑵中学校学習指導要領（平成29年告示）文部科学省　平成29年３月告示

授業を創る

体育から学ぶ指導力

市原市立戸田小学校教諭　杉浦（すぎうら）　由記（ゆき）

1　はじめに

現在、私が勤務する市原市立戸田小学校は、体育研究91年目を迎える体育の研究校である。体育の指導を中心として、知・徳・体の調和がとれ、自分の力で未来を切り拓く人間の育成を目指している。

そこで、運動の系統性を意識し、対話的な学習を大切にして技能向上をめざす本校の研究の中で、重要だと考える指導方法ついて紹介する。

2　運動の系統性を意識して

本校では、器械運動の研究が積み重ねられる中で、動きの系統性が整理されてきた。そこから、どの技においても、その基礎となる動きや応用となる動きを意識し、指導することが大切だと学んだ。

例えば、マットで倒立に取り組むときは、まず基礎となる腕で体を支える力や様々なポーズ・姿勢を保つ力、逆さまになる感覚などが、児童に身に付いている必要がある。それを教師が把握するため、または児童自身が自分の力を知るため、単元の初めに「かえるの足うち」「背支持倒立」「壁倒立」や「腹部支持倒立」に取り組む。（資料１）

また、倒立は、ただ逆さまになってバランスがとれればいいと児童が覚えてしまうと、応用となる倒立前転や前方倒立回転につながらない。着手位置と目線で三角形にすることや、手首の真上に肩がくる正しい姿勢を身に付けることが、児童の力を伸ばすことにもなる。さらに、低学年の前転等、マットを使った運動遊びを指導するときは、手のひらをしっかり開いて指先で体重を感じ、目線をどうすれば体を支えたり回ったりできるかをつかませることで、中・高学年の倒立へつなげることができる。

器械運動に限らず、教師がこうした動きの系統性を知り、意識しながら指導に当たることで、児童の力を伸ばし、動きの質を高めていくことになる。

倒立につながる運動（資料１）

<table>
<tr><td>１年生</td><td>２年生</td><td>３年生</td><td>４年生</td><td>５年生</td><td>６年生</td></tr>
<tr><td colspan="2">かえる倒立30秒
背支持倒立５秒</td><td colspan="2">補助倒立10秒
手を腰にした
背支持倒立10秒</td><td colspan="2">補助倒立10秒
腕を伸ばして支える
背支持倒立10秒</td></tr>
<tr><td rowspan="2">かえるの
足打ち
２回</td><td rowspan="2">かえるの
足打ち
３回</td><td colspan="4">腹部支持倒立
肋木５段目→段数を上げる→垂直</td></tr>
<tr><td>壁倒立</td><td>倒立</td><td colspan="2">倒立１～２秒
（歩いてもよい）</td></tr>
</table>

3　「わかる」・「できる」体育のために

学習指導要領が改訂され、知識と技能の観点が一つになった。知識と技能を関連付ける際には、視覚化と言語化が欠かせない。

本校では、動きの系統性を、体育館の壁面に写真付きで掲示してある。また、授業ではラシャ紙１枚程度に本時のめあて、取り組む動きの連続写真、動きのコツなどを書き込んだ掲示物を作成し、児童へ視覚的に理解させる。（資料２）

さらに、ICT機器を活用して、現在の動きを児童が自分の目で確認できる学び方も効果的である。実際に動画を活用しながら、よりよくするための助言をしたり、学級全体でよ

い動きを共有したりすることで、知識を深めることができる。

学級で動きを共有するときは、オノマトペを活用する。例えば、鉄棒の前方支持回転では、「『クルン』と回るより、『クールン』という感じだね。」など、動きのリズムや体の動かし方が伝わる言葉を児童と一緒に考える。こうした動きの言語化は、児童に動きを理解させる役割とともに、児童同士の関わり合いにも効果的である。どうアドバイスしてよいか分からなかった児童も「今は、クールンができていたよ。」というように、声をかけやすくなる。

目で見て、耳で聞き、友達に伝え、自分で動きをやってみる。この繰り返しが児童の「わかる」・「できる」ことにつながる。

学習の掲示物（資料２）

４　対話的な深い学び

対話的な学びは体育においても重要である。教師と児童との関わりはもちろん、児童同士の関わりも重要である。先に記したとおり、児童が動きの系統性や動きのこつを理解することが、児童の対話的な学びにつながる。しかし、児童同士の関わり合いは、知識があれば十分というわけではない。そこには、「誰かと関わることは楽しい。」「対話は上達することにつながる。」という実感が必要である。

この二つの実感は、すぐに感じられるものではなく、時間をかけて得られるものである。本校では、体育で大事にしたいことを「汗かき賞」、「早並び賞」などと賞にして、子供たちの行動を認めるようにしている。その中に「声かけ賞」もあり、低学年の時から、友達に声をかけることは大事だと学ぶ機会を設けている。声をかけられて嬉しいと感じた経験が、対話的な関わりの基礎となる。このような学びを続けるうちに、自然と友達に助言をしたり、時には補助をしたりする関わりに発展していく。また、教師が、「みんなのアドバイスが〇〇さんの上達につながったね。」と称賛することで、児童は対話によって上達することができると理解し、対話的な学習を進んで行うことができる。

また、対話的な学習は、運動の得手不得手に関係なくできるため、運動を苦手としている児童が体育で活躍する場面になり得る。運動が苦手でもできることがあるという気持ちが体育嫌いを減らし、体育の目標である豊かなスポーツライフを実現する第一歩になると考える。

５　おわりに

私は、体育で学んできたことが、学校教育全般において生かすことができると感じている。例えば、系統性をもった指導は、どの教科の指導においても有効であり、対話的な学習は、互いを認め合う学級づくりに欠かせない。さらに、「わかる」「できる」を視覚的に学ばせるために、大型電子黒板等を他教科で多く活用したい。このように、体育で学んだことは、私の教師としての土台になっている。

児童の実態に合わせた指導法は多様なため、今後も更に児童理解に努め、学び続けていきたい。